

## Progress towards polio eradication, worldwide, January 2017–March 2019 World Health Organization Weekly epidemiological record.

Greene SA, Ahmed J, Datta SD, et al. CDC, Morbidity and Mortality Weekly Report. 2019; **68**: 458-462.

福岡看護大学基礎・基礎看護部門 基礎・専門基礎分野教授 / 福岡歯科大学医科歯科総合病院  
予防接種センター長

岡田賢司

**TAKE HOME MESSAGE** : 野生株ポリオウイルスによる症例数は2017年に過去最低となったが、2018年には増加した。一方、伝播型ワクチン由来ポリオウイルスによるアウトブレイクが、予防接種率の低い国や地域で発生している。

## SUMMARY 要旨 1. 野生株ポリオウイルス(WPV)

**による患者数** WPV2 (野生株ポリオウイルス2型)は2015年に根絶が宣言され、WPV3は2012年以降、検出されていない。WPVによる患者数は2017年に過去最低の22例となったが、2018年は33例に増加し、2019年1~3月には12例が報告されている。全例WPV1で、アフガニスタンとパキスタンのみから報告されている。

## 2. 伝播型ワクチン由来ポリオウイルス(cVDPV)患者数

cVDPVによる患者は、2017~2019年(5月3日時点)で8カ国から210例が報告された。cVDPV1はインドネシアとパプアニューギニアから急性弛緩性麻痺(AFP) 27例と環境水サンプル7件の陽性報告があった。cVDPV2は、7カ国(コンゴ民主共和国, ケニア, モザンビーク, ニジェール, ナイジェリア, ソマリア, シリア・アラブ共和国)においてAFP 176例と環境水サンプル97件の陽性報告があった。cVDPV3はソマリアでAFP 6例, 環境水サンプル11件の陽性報告があった。

## Continuous Versus Intermittent Vancomycin Infusions in Infants: A Randomized Controlled Trial.

Gwee A, Cranswick N, McMullan B, et al. Pediatrics. 2019; **143**. pii : e20182179.

慶應義塾大学医学部小児科学 専任講師 / 慶應義塾大学  
病院感染制御部 副部長

新庄正宜

**TAKE HOME MESSAGE** : 乳児早期へのバンコマイシンの持続投与は、間欠投与の代替えになりうる。

**研究実施場所** : オーストラリアのNICU, PICU(メルボルン, シドニー)

**研究方法** : 2施設, 非盲検, RCT(ランダム化比較試験)

## SUMMARY 要旨 通常バンコマイシンは間欠投与(1日

2~4回)を行い、トラフ濃度で効果を推測する。本研究では持続投与と間欠投与を生後0~90日の児104人(持続投与群53名, 間欠投与群51人)で比較した。持続投与群は、初回採血で目標血中濃度に達した率(85% vs. 41%,  $p < 0.001$ ), 投与量の調節回数(中央値0回[範囲0-1] vs. 1回[0-3];  $p < 0.001$ ), 目標血中濃度を得るための投与量(40.6 mg/kg/日 [標準偏差 10.7] vs. 60.6 mg/kg/日 [標準偏差 53.0];  $p = 0.01$ ), 目標血中濃度達成に要した平均時間(27.1時間 [標準偏差 10.8時間] vs. 33.6時間 [標準偏差 38.8];  $p = 0.03$ )のいずれにおいても、間欠投与群より優れていた。クレアチニン値が普段の1.5倍に達した者は両群とも1人だけであった。ただし、持続投与では、血管確保や配合禁忌の検討がより重要となるかもしれない。本研究では聴力解析やコスト解析は行っていない。

## Meningococcal Disease Among College-Aged Young Adults: 2014-2016.

Mbaeyi SA, Joseph SJ, Blain A, et al. Pediatrics. 2019; **143**. pii : e20182130.

川崎医科大学小児科学講座 教授

中野貴司

**TAKE HOME MESSAGE** : 米国で18~24歳の大学生におけるB群髄膜炎菌感染症のリスクは増大し、ワクチンという予防手段の存在を認識する必要がある。

**研究実施場所** : 米国

**研究方法** : 米国の公的なサーベイランス報告(National Notifiable Diseases Surveillance Systemとenhanced meningococcal disease surveillance)のデータから、2014~2016年の18~24歳における髄膜炎菌感染症のリスクを、大学生と大学生以外の者で比較した。

## SUMMARY 要旨 2014~2016年の3年間に、18~24歳

の年齢では166例の髄膜炎菌感染症の患者報告があった。平均の年間罹患率は、人口10万人あたり0.17例であった。B群髄膜炎菌は大学構内で6件のアウトブレイクが報告され、調査期間中に報告された大学生のB群髄膜炎菌患者の30%を占めた。大学生以外の者と比較して、大学生のB群髄膜炎菌感染症罹患の相対危険は3.54 (95% CI : 2.21-5.41)であった。一方、C, W, Y群の髄膜炎菌感染症の相対危険は0.56 (95% CI : 0.27-1.14)であった。分子疫学解析の結果では、B群髄膜炎菌で頻度の高いジェノタイプはCC32/ET-5とCC41/44 lineage 3であった。罹患頻度が高いわけではないが、18~24歳の大学生では散発例、アウトブレイクともにB群髄膜炎菌感染症に罹患するリスクが増大する。医療関係者、大学生とその両親は、B群髄膜炎菌感染症に対してはワクチンという予防手段があることを認識すべきである。